

猫を拾ったんだ。

捨て猫って言うか、捨てられ猫って感じだったんだけどね。  
すごくすごく、かわいいんだよ？

## 第一話

僕は今、大いに泣いている。なぜかという、先ほど記念すべき百人と一人目の恋人に振られたからだ。

悲しい、悲しすぎる。これは地面にめり込むどころではすまない。けれどよく考えたら、「え？俺ら付き合っていないよね？」という表現で愛を断られたので、もしかすると僕と彼は恋人ではなかったのかもしれない。いや、違うな。恋人か恋人でないか、彼が記念すべき失恋相手百一人目だったかどうかは、この際問題じゃない。

僕はいよいよあの男に四回もハメられたのに、全く思いが通じてなかったことに傷ついているんだ！あんまりだ！お前が出かけたの、全く思いが通じてなかったことに傷ついていたんだ。お前が食いたいと言ったから、わざわざ有名ホテルの何十時間もかけて作られたらしいハヤシライスを取り寄せて、家で真空パックに入った材料をわざわざ煮込んで食べさせたんだぞ。なのにそれから三日後の今日。僕の家に来るはずの約束が、電話したらあれだ。電話口でヤッてる声も聞こえた。ねえなんの話って言うてるその横の声の持ち主は誰なんだ？

ふざけるな！返せ、ハヤシライスと僕の純情を！！！けれどアスファルトを叩いて喚き倒していたら、突然僕の傷心に寄り添うコメントが届いた。

「それは災難だったね」

そうでしょうそうでしょう、僕はとても災難だった。そう僕は思った。でも僕は同時に、誰が自分に話しかけているんだ？とも思った。

「でも俺も食べたいなあ、ハヤシライス」

けれども思いやりの言葉は、瞬時に飯をたかろうかと画策する言葉に変化した。悔しいことに家にはまだ一食余っている。それを食べることは可能だ。

いやでも、余っていると、誰かが残りを食べられるとか、そういう話ではない。

なんだ？この夜の公園で泣きわめく僕の隣に、わざわざしゃがんで話しかけて来ている男は。普通引くぞ、大の男が泣いていたら。

おや、けれど文句を言おうと思ったのに、困ったことに顔を上げて見てみたら、彼はとんでもないイケメンだった。かっこいい、ドストライク、好み、ものすごい僕の好みじゃないか。百点満点中一万点くらいだ。顔だけで考えたら文句は出てこない。あまりの顔立ちにぼうっと見とれていたら、そっと肩に手が置かれて、軽く彼の方へと引き寄せられる。近づくのは大人の男性の匂い。背景に満月の夜空。あたりは僕ら二人だけ。静寂のなか

で微笑む目の前の美男子は、ねえ、と優しく僕に声をかける。

僕としては、失恋の真つ只中に起きた異常事態だ。この状況を冷静に受け止めることが、はたしてこの世の誰にできるだろうか。

ああ、おかしいな。僕は今しがた恋に破れたというのに。

「君の家に行ったら食べられるかな？」

どうやらまたたく間に、新たな恋に落ちてしまったらしい。

そうして僕の家にあったラスト一食のハヤシライスを彼にご馳走した後、ご挨拶かのように僕らは一発ヤツた。

やって分かったのだが、どうやら僕と彼はとても体の相性がいいらしい。あと単純に、彼の上手さも追加されると思う。初回から意識がトブほど良かったのは初めてかもしれない。優しい顔していじめ倒してくる指とか舌とか声とかがヤバすぎて、僕は最中何を口走っていたか把握していない。

ただし彼に対して悪い印象が一ミリもなかったので、翌朝速攻で連絡先を交換し、そこ

からは頻繁に僕の家に来るようになった。

もちろん泊まりだ。そして必ずやることはやっている。

「猫山君は感じ方が可愛くて好き」

ベッドの外でもそうだけれど、彼は趣味ですか？と疑いたくなるほど僕を褒めてくれる。それが僕は嬉しい。でもまだ慣れなくて、小さい声でまたそうやって、なんて言ってしまう。

素直じゃないやつ、と自分でも思うものの、こちとら百以上の負けを経験済みのレジエ  
ンダリールーザーだ。卑屈にもなる。

「橘さんは、僕を高く評価しすぎだと思う……」

「そう？事実だけ言ってるつもりなんだけど」

ああ、そうやってキョトンとする仕草が何とも可愛らしい。圧倒的に彼の方が可愛くて  
イケメンで最強じゃないか。見ていられずに目をつむっても、顔が赤くなってしまう。

それを笑われた後、横たわる身体を抱きしめられて、またしてもかわいいの言葉で攻め  
られる時間がやってきた。まだ始まってもないのにドキドキしっぱなしで辛い。

でもずっとこのままでいたらおかしいなと思って目を開けると、すぐ目の前に彼の顔が  
あって。驚いて声をあげようとした瞬間にキスされた。

橘さんはキスも上手だ。僕の舌を安々と絡め取って、比較すると厚い舌で翻弄する。

いとも簡単に空気を構築する彼は、優男風の策士なのかもしれない。ただし空気に飲まれてマイナスの結果になることはないので、僕は安心して彼に流される。

「ん、んっ、っ、た、ちばなさ、ん」

「何？」

「キス、も、好きなんですけど、その」

「どこまで期待してる？」

「っ、あ」

すると僕の熱を撫でて、さわさわ服の上から柔らかく撫で回すその手付きのいやらしさと、顔面の爽やかさが全く噛み合っていない。もどかしい刺激が辛くてキュッと足を閉じたら、耳元で咎める声がする。

「ちょっと。なんで足閉じるの？」

「だ、だって触り方、やらしい……」

「ん？もっとやらしく触ってほしい？」

「や、そんなこと」

「嘘はよくないよ、猫山君」

「んんんっ……!!」

柔らかく微笑みながら僕の乳首をカリカリと引っかくさまは、まるでじゃれているようだ。ただし服の上から引っかかれるその場所は、もどかしさを訴えるようにツンと尖っている。もっと触つてと主張しているかのようだ。それを自覚してなお、橘さんは耳元で「硬くなってる、もっと触ってほしい？」なんて聞いてくる。分かってはいるなら触つてよ、そう思うのに耳をぬるんと舐められたら言葉が詰まる。

「はう、う、やつ、そ、んな、触り方……」

「そんなってどんな？」

「や、意地悪しないで」

「してないよ？猫山君をもっとエロくしてるだけ」

「んうう……ツツ!!」

きゆう、と乳首を服の上からつままれた。でも直接触ってもらえているわけではないから、切なくて思わず彼の腕を掴んでしまう。誘うように指先を握った。けれどその指をするっと撫でられては、耳をはむはむと囁まれて。たまにねっとり耳の裏側を舐められては、硬度が増している熱を布越しに揉まれる。

「んっ、ふ、う、あ、や、あ、あっ……!!」

「かわいい、かわいいね、ちょっとしか触ってないのに感じちゃうね」

「ひう、っ、言わない、で、恥ずかし」

「ええ？ここで恥ずかしがってたら、この先どうなっちゃうの？ねえ、もうイキそう？これくらいでイッチャいそう？」

「はっ、はっ、やっ、触るなら、ちゃんと……っ！」

「触ってあげるよ。もつと猫山君がおかしくなった頃にね……」

「ッ、ひ、っくっくッッ！！！！」

僕が嫌だと言っても、んあ、とかやらしい声をあげながらねちっこく耳を舐められた。息がかかるくらいでも首をすくめるその場所を、しっこく刺激されるのは弱い。そしてそのせいで期待に滲む場所を、直接触らないけど放置もしないというテクニクも絶妙なさじ加減だと思う。

さわさわ、さわさわと、きわどいところを擦られるとたまたなかった。ああ、エロい、もどかしい、耳もあそこもどうにかなくなっちゃいそうだと一人焦る。どうしよう、もうこれだけでイクかもしれないと内股になる。

イキそうになって、ぐっと思が詰まった。でもさすがにそれは早漏過ぎって言うか堪え性が無いじゃないかと思って、意識的に我慢をきめこむ。自分の達しそうになってる部分

に耐える耐えろと念を送ってどうにかした。

なのに、今そこにはばかり意識を向けているのに。ここにきて、散々焦らしたのが嘘みたいにするんとパンツの中に手が入ってきてきてドキッとすする。スウェットと、その下の薄い布の奥に潜む手は、卑猥に轟いている。どんな指使いをしたら僕をここまでおかしくできるんだというくらい、いやらしい動き方。どうにもならない気持ちよさだけを与える指に、僕はひたすら責められた。

「ふあっ!? やう、うっ、うっ、な、あ、なんでっ、なんでえっ!?」

「意地悪なしで触ってもらえて嬉しいね?」

「はあ、あ、ああっ! だめっ、だめだっ、て——っ!」

突然の直接的な刺激に、堪えていたものがすぐ出てしまいそうになる。必死で止めようと内股になって、橘さんの意地悪な手を拒んだ。だけど、今さらの抵抗にほぼ意味はない。しつこく揉みこまれたり扱かれたり、先端を挿られたら、僕はあっけなくイってしまった。

「あ、あ、う、んんん……!!」

「ふふ、無理して我慢しなくてもよかったのに」

「そ、んな、だって」

「まあ我慢したって意味ないけどね」

「んえっ!？」

早い、てか感じ過ぎだつてと一瞬賢者タイムが訪れる。ただし僕が賢者になれたのも一瞬だった。

この優男はニコニコ笑ってまた僕の熱をこねくり回すのを再開した。ちょっと、一回出したの分ってるでしょ!と文句を言いたいのには、愚かな僕から出てくるのは甘えたような喘ぎ声だけになってしまう。

「ひっ、あ、あ、う、な、に、なんで……!?も、出したあ……っ!」

「うん、ここがドロドロだから分かるよ」

「んっ、んっ、じゃ、も、止め……!」

「猫山君にまだまだ感じてほしいから止めない」

「~~~~っ!?や、やだ、もういい、ちゃんと気持ちよかったから!」

「それより良くしてあげるよ」

「わっ!?!ちよっ、あ、うううっ!」

仰向けだった身体が突然押されて、僕は横向きに橘さんと向かい合った。でも彼は僕と目を合わせた後、すぐに上着をめくって胸に吸いつく。焦れたい刺激で感度があがったそこを、ぱくっと啜えて。軽く唇で挟むように愛撫したかと思えば、先を愛でるように舐

めて。それだけでも彼の髪を引いて悶える僕を無視して、今度はきつめに吸って。ダメダメと首を降っても、次は下着の中の手がヌルつくそこをしっかりと扱ってきた。

「んんんっ！んあ、ああ、だめ、だ、あ、んっ、だめ、だめだっ！」

けれど手足をバタつかせて、時には叩いたりして静止を訴えても、橘さんは無言だった。というより胸に口をつけて、夢中でしゃぶっていたとも言える。ただし返答しないのは絶対わざとだ。返事をせずにひたすら舌を動かすのをやめてほしい。実力行使で顔を引っぱがそうとしたら、背中に腕がまわって僕も離れられなくなった。その合間につう、と背骨から腰の方を人差し指でなぞられて、お尻の近くまで来たその指がトントンと腰を叩くだけで、僕の身体はビクッと大きく反応してしまう。

感じる場所を押されてそうなったのか、その先を期待して跳ねたのかも分からない。でも頭がいっぱいになりそうなときに、急にふう、と耳に息がかかって。

ああ、力が抜けちゃう、感じる、ヤバイ、ヤバイと焦っていると。ゾクゾクするほど甘い声が、僕に優しく命令する。

「ほら、イッて……？」

「っく、ひ、いい——ッッッ！！！」

橘さんをベットの外に追いやらんとでもするくらい、僕の身体は大きくしなった。出し

たものはさつきより少ないのに、イキ方は激しかったと思う。ガクガク腰が跳ねて、上手く着地できない。褒めるように頭を撫でては耳に唇を当ててくる程度の刺激でも、小さな声を上げてしまう。

「ふあ、あつ、あ、あ」

「イキやすい猫山君の身体、大好き。ずっといじめたくなっちゃう」

「んん、つ、あ、ま、待って、そんなに、ずっとは」

「ずっとは無理？でもそのお願いは聞けないかな」

「ん、むっ、っ」

半分ぐったりしたところに本気でキスされると、なんだか匙を投げ出したくなる。もう二回もイッたんだ、このまま好きにしてもらったらいいじゃないかと、全ての抵抗を諦めたい。だけど僅かに理性が残る僕は、フワフワした頭の片隅で考えている。いやいや、まだ橘さんの入ってすらないから、と。なんならこれ多分前戯もいいところなのに、それで二回も出してんの異常でしょ、と。

とは言っても抵抗できる力が残っているんですか？と聞かれれば即答で「残っていない」になる。つまり、僕は無抵抗にやられる以外の道は既がない。なので案の定、キスの直後にはずっぷりと後孔に指が入っても何もできない。

「今日も準備してくれたの？もう柔らかいね」

「だ、だって、橘さんが今日来るって言うから……」

「うん、急に来たのにありがとう。いつも準備してくれて嬉しい。いい子」

でも不服に流されているかもしれないとむくれた僕は、こうして褒められておでこにキスをされたおかげで完全消滅した。いい子、なんて言ってくれたのは橘さんが初めてだ。他の人は、当然のようにほぐれたそこに当然のように入れた。だけど橘さんは絶対そんなことしない。すぐに入るよと僕から言っても、もっと楽しみたいからまだ大丈夫と言ってくれる。それが僕は嬉しい。

けれども憎らしいのは、彼が「楽しんでる」のは本当であり、その楽しみの対価として僕が死ぬほど感じさせられるということ。もちろんここでもう一度言っておくが、未だ彼のモノは入っていないにも関わらずの惨劇だ。

ほら、まさにこんなことを思っている間に、二本の指が前立腺を挟んでぐにぐに揉みこんでくる。その触り方は感じ過ぎるから好きじゃないと、この前訴えたばかりだって言うのに。なんで同じことをするの。

「はう、ううう……っ！あ、そ、それ、好きじゃ、ないい！」

「好きじゃないのにお尻のなかすっごいうねってるよ？本当に嫌いななの？」







「ううっ！ううううううううっ！！！！っは、は、あ、あああああっ！！イッ、く、も、あ、また、あ、あああ~~~~っ！！！！」

「かあわいいの。ほらほら感じて？お尻で感じて女の子みたいにイッて？」

「んんああああああ……ツツツ！！！！ああっ！あつ、ひ、~~~~っ~~~~っ~~~~ううううううう！！！！」

イッてもイッても終わらなかった。というか「イク、落ち着く、イク」というサイクルが途中から狂い始めて「イク、イク、イク、ずっとイク」に変わってからは息すら苦しかった。それを分かっているのかいないのか、にこにこ笑いながら乳首を引っかかれて呼吸が危うくなる。

「はくう……っ！あ、あ、だめ、もうダメ」

「ダメなことは何？ちゃんと行って？」

「っ、あ、あ、ツツ！」

「言わないってことは、ダメなことはないってことだよな？」

「ち、ちが、も、全部」

「じゃあ言って？言わないとやめてあげないよ？」

「ひううううう……っ！！！！」

ほら早く、なんて言われて耳を舐められたら余計に言えなくなる。その怖いぐらいの快感から逃げたくて、必死に逃げ道を探した。でもちゃんと口にできるわけもないから、ひたすら首を振って抵抗した。けれどそれを繰り返していたら、急に猫山君？と呼びかけられて。反射的に動きを止めて、目があったらキスをされた。

「んっ!?んんっ!んんんんっ!!!」

「ん、ふ、っ、んん……」

「ふ、んむっ、あ、だ、だめ、やっ、たちばな、さ」

「キスは嫌い？」

「そ、そうじゃないけど、でも」

「じゃあいいよね？」

「やっ、ん、んん、~~~~~ツ、む、んううううっ!!」

問答無用でキスされながら中をコリコリいじられたら、すぐにも発狂しそうなくらいイキまくっていて、とうにかイキっぱなしの状態から帰ってこれなくなる。そうして口を散々弄ばれた後、その場所から離れた橘さんの唇は間を置かずに僕の胸をついばむのだから最悪だった。

「はうっ!?っ、な、んで、も、やだあっ!」

「ん？気持ちいいこと好きでしょ？」

「ひっ、う、い、今は、も、いい、もういいから！」

「俺はしてあげたいなあ」

「んい……ッツ!?もっ、もういいっ！もういいってばああああっ！！だめ、だめ、っああああああ！！！！」

抵抗力はそがれているのに、そこから数分か、十分程度そのままいじめられた気がする。気持ちいいのは間違いなかったけど、そんなにいらないうちもまた本当だった。イキすぎてバチバチと脳は弾けたし、身体が吹き飛ばかとも思った。もちろん、その間ずつと指は動いていて、彼の舌も活動は終わらなかったけれど。

でもある程度時間が経ったら、満足したのか指はようやく抜いてもらえた。ただし名残が残っていて、未だ全身の震えが収まらない。もう体力もそぎ落とされてクタクタだった。

それでもぐつと両足を開かれたら、来る時が来てしまったと顔を青くするしかない。

橘さんがさっさと入れないのは、彼が勃起不全的な要素を秘めているとか、今日は乗ってないとか、そういう理由ではないらしい。単純に僕をグズグズにするのが好きなんだと少し前に本人から聞いた。それを聞いて、僕という人間に早く入れたくなる魅力が無いなんて悲しい原因ではないのは分かったけれど、安心材料にはならなかった。

いや、僕だって。無理やり突っ込まれるよりは、なんというかこう身体を重ねる的いちやつきは大歓迎だ。でも橘さんの場合愛し方が少々粘着質と言うかしつこいというか、グズグズにする加減がバグっている。

「っ!? た、ちばな、さ、だめ、いま、は、だめだって」

「呂律が回ってない猫山君もかわいいね」

「イク、から、いれたらぜったい」

「じゃあ俺のでイッて?」

「うああああああ……ッッ!!!」

そしてそういう倫理観は壊れているのに、僕の感じる場所を当てることには正確無比だ。なので入れただけで僕の前立腺をゴリゴリと押しつぶしたソレによって、あっさりと僕は精液を吐き出した。

「入れただけで本当にイッちゃったね」

「うっ、っ、わ、ざと」

「うん、わざと当てた。猫山君ならトコロテンしてくれるかなと思って」

「僕は、きつい、のに」

「ごめんごめん。でも見たくてつい」

けれども謝られても、きついことはきついし、僕だって怒る時くらいあってもいいはずだ。もちろん、ちゃんと文句を言ってやろうと意気込むときもある。なのに我儘でごめんね？とかわいく言われると、今日こそ文句を言ってやるんだ！と心に決めたはずの僕は尻尾をまいてどこかに行ってしまう。なので彼の退場に伴い、怒るはずの口はもごもごするだけの口となり、パクリと橘さんに食べられるという悪循環だ。

伝家の宝刀であるキスをおみまいされるのが、僕の中では最も弱い。それをおそらく橘さんも分かっているので、ちょっと具合が悪くなったらキスをしてくる。ズルい。だけど僕もちよろいのでキスですっかり気分が良くなる。だから、ゆっくり向かい合ってゆらゆら動いていたそれが抜かれて、身体がひっくり返されても。少々無理やり四つん這いにさせられて、再びそれが入ってきて。きゅんと後ろをヒクつかせるくらいで、文句の一つも出てこない。

「ふう、っ、ん……」

「猫山君のココ、何回でも吸いついてきてエロい」

「……嫌い？」

「ううん。そういうやらしいところも大好き」

「ん……」

安心感を増強するように背中に落ちてくるキスが気持ちいい。どんどん僕が満たされていくのが分かる。さっきと違って大きな快感はないのに、ぞくぞく、ぞわぞわと内側から彼への気持ちと快感がこみ上げてくる。もっと、もっと。もっと僕を求めてよと、声にならない声の外に出ていく。なのにこんな時に限って、橘さんは浅い所ばかりを往復している。

「な、んで、もっと奥、まで」

「もっとってどれくらい？」

「っ、ぜ、んぶ、入れて、橘さんの全部……っ！」

「全部？」

「はっ、あ、きて、早く、早く……!!」

待ちきれなくて、自分から腰を押し付けた。ゆっくりゆっくり、彼が深いところまで来ているのが分かった。はあはあ息を吐いて、いいところに、ひいてはもっと奥までそれで埋め尽くされるのを期待する。

けれどもあと少しというところまで入れたら、すすつと彼が腰を引いてしまった。それに驚いて振り返ると、にこ、と微笑まれて。そのまま腰を掴まれて、ゆるゆると動かされ始めた。

「ふえ、え、やっ、ぬ、抜かないで」

「抜いてないよ？入ってる」

「違う、やだ、やだ、もっとして、奥まで入れてよお……っ！」

「ふふ。猫山君のおねだりが聞きたくて、つい意地悪したくなる」

「んくううう……ッツ!？」

さわさわっと先走りをこぼしてる先端を擦られて、ビクッと身体が揺れ動いた。そのぬめりを帯びた人差し指の先で、次は淡く乳首をくりくりなぞられる。なんだよその触り方、やらし過ぎだからと悶えた。それでも絶妙な距離を保つ橘さんは、ふとした拍子に腰を滑らせたりしない。未だ軽い出し入れを繰り返している。

「やっ、あ、ああ、ひどい、ひどい、こんなのズルいい……!」

「何がズルいの？」

「んんっ、んっ、も、っと、ほしく、なっちゃ……!」

「いじめてほしいの？俺のが欲しいの？」

「っ、たち、ばな、さんのが、ほし……っ!」

「……じゃあまだあげない」

「~~~~っ!うう、ううううっ!」

濡れた先端が、またしても指一本でなぞられる。ただしイカせてはくれない。つるん、

つるんとぬめりを確かめるように動かされては、時々穴を突かれて。ああ、そうじゃない、もっと強く、できないのならせめて後ろをと願って反り返る背に舌が這った。弧を描く背骨に添って上へと移動する、その滑らかな触感だけで達してしまいそうになる。そんな時にお尻の谷間をずんと指で刺激されると、弄ばれている惨めさと、どうにでもなれという諦めと、グズグズにとろけてしまいそうな自分が一気に襲ってくる。

「あ、あう、っ、ううう、っ」

「もうおねだりの時間は終わり？」

「はっ、あ、あ、あ、も、もう、僕……っ！」

「切羽詰まってる猫山君って最高にかわいい。好き、好きだよ……」

「んんん……っ！」

色んな感情や快感がぐしゃぐしゃになっているところできゅっと抱きしめられると、頭の中が思考を放棄して橘さんに埋め尽くされる。愛されている実感だけで、後の何もかもを考えられなくなる。そしてふわっと僕の身体や心が宙に浮いた心地になったところで。

橘さんは緩んだ中へと、容赦なく押し入った。

「あっ」

簡易的に喘ぐけど、残念ながらその快感は度を超していた。びゅっと前から少量の液体

をこぼした後、二、三回彼に後ろから突かれればそれに連動してまた少し熱を放つ。やば、これ入れられる度にイクじゃんと思っていたら、肩を掴まれて前進を阻まれる。

前に行けないのだから、後退するか留まるか、もしくは強引に引き寄せられるかしか選ぶようがない。そしてそのどれもが、僕がイクというルートに直結している。もちろん橘さんは、僕がどうなるかを見越して肩を掴んでいるはずだ。無論それを踏まえたうえで、彼はさっきまでの動きが休憩だったのかと問い詰めたくなる速度で僕を貫き始める。

「あつ、あつ、あ!?う、う、ん、あ、やつ、待つ、ひ、ぐ、う、——っ!?うあああああああ  
あっ!」

「奥まで、してほしいんだもんね?ほらほら、奥のいいところグリグリしてあげる」

「んんんんんんんんんんんんんん!?だ、め、イッてるのにしちや、あ、あぐっ!」

「ふふ、ここもドロドロ。気持ち良さそう」

「んくうううう……ツツツ!!!」

極上で強烈な快感を後ろで味わっているときに、つう、と先っぽをなぞってくるのはもう流石としか言えない。それで力がぬけて、もっと深くハマってしまうし。強弱のつけ方が最高すぎる。思わず身体が崩れた。崩れてもなお、前はいじめられた。もう片方しか肩は押さえられていないのに、それを跳ねのける体力がない。

「ああ、あつ、ず、るい、そんなのだめだよお……!!」

「だってこうすると、猫山君はかわいい声で鳴くんだもん。もつと聞かせて?」

「ううう……っ!無理、気持ちよすぎて無理いっ!」

「残念。じゃあ仕方ないからゆっくりに変更しようかなあ」

「ふえっ!?!」

でも僕が言葉で抵抗していたら、橘さんは急に攻め手をパタリとやめて、僕の身体を持ち上げた。そして座った彼の上に、どすつと僕の身体を落とす。

僕はちょっとだけ、ゆっくりやると言った橘さんに期待した。過度に責められるだけじゃなくて、時間をかけてするのも好きだ。でも橘さんの言うところのゆっくりは時間をかけるという意味ではなく、背面座位の状態で緩やかに出し入れする、という意味合いだったらしい。そして残念なのは僕もで、僕はこの責め方にも弱い。それこそ、悶絶するだけになつてしまふくらいに。

「あつ、ああ、ああああ……っ!ツ、これ、だめえええっ……!!」

「んん?ゆっくりしてるでしょ?」

「ひぐっ、う、だって、気持ちいのお、わらなく、っ、な、っちゃ」

「そうだね、俺に終わらせる気がないから。だから猫山君はずっと気持ちいいまま」

「はひっ、ッ、そ、そんな、だめ、だめっ、んあ、やだっ、気持ちいいのずっとはやだあっ!!  
へん、に、なる、もうだめっ! うっ、あ、イツ、あ、ま、また、来ちゃ……!!」

「ごめんね? でも、いっぱいイッていいからね……!」

「~~~~~っ、ぎ、っ、ッッ! んんああああああ……ッッッ!」

ごり、ごり、ごり、と長い時間をかけて前立腺が擦られる。そのまま奥の方に留まって、ぐっと身体を抑え込まれる時もある。いずれにせよ、この身を抱えられている僕には、身体を倒すことも、彼と距離を取ることも許されない。快感の逃げ場がない。感じる他ないこの体勢は、半ば拷問に近いと僕は思う。甘くて辛い攻め手は、橘さんの気分次第で強弱も変わって辛かった。

「ふ、あ、あ、ああ、も、やつ、あ、ああああ……!!!!」

「ねえ、さっきから嫌々って言ってるけど。本当に嫌なの? こんなに感じてるくせに。猫山君は俺に嘘つくの?」

「くひっ!? あ、あ、ちがつ、うう、ごめ、なさ、あああだめ、でもだめ、だめなんだってばあああっ!」

ガクガクと身体は痙攣していた。無意識に暴れる僕を、橘さんは乳首をいじりながらたしなめる。それに僕がまたイッても、関係なく。

「こーら、逃げないの」

「んっ、だ、め、胸、やあ……!!」

「じゃあどこならいいの？」

「ど、どこも、しないでっ!!」

「そんなの無理。だって猫山君ったらすごいエロいんだもん。ほら見て？こことかどろっどろなの。分かる？」

「うああああ……?!?!ひっ、い、あ、ああ、~~~~~ツツツ!!!!!!」

ゆったりと上下に扱かれるそこは、いっそ今だけ身体から分離したいぐらい切ない場所だ。イキっぱなしになってから、もうどれくらいなんだろう。離してもらえないせいで、微弱ながらにずっと達している。そのせいで濡れてテラテラと光るその場所を見せつけては、僕の耳元でやらしいね？と囁かれた。ゾクゾクゾクツと股間から脳のとっぺんまで悪い快感が襲って、ぎゅっつと彼の熱を締め付けてしまう。

気持ちよすぎて、頭の中が真っ白になった。はくはくと口を動かして、わけの分からないことしか言えなくなる。

「んあ、ああ、ヤバい、っ、イク、も、イクの、気持ちいい、あ、あ、気持ちいいよおおおっ!!」

「じゃあ言つて？俺のちんこ気持ちいいって」

「はあっ、あ、橘さんのちんこ、気持ちいい、好き、すきっ！」

「どうされるのが好きなんだっけ？」

「なっ、何されてもいい！橘さんとするの、全部気持ちいいから……」

「……ああもう。かわいい、かわいすぎる。ほんと魔性すぎるなあ猫山君は。だからやめられなくなっちゃうんだよ」

「ううっ!？」

自分で僕を持ち上げたのに、今度は僕をまたベッドに押し付けて、橘さんは背後から覆いかぶさってきた。しかもどんどん体重をかけられるものだから、僕はうつ伏せでベッドに寝転がる形になる。苦しくてじたばた足を動かしたら、ぎゅうつと橘さんから抱きしめられた。そのせいで思いっきり深く彼の剛直がハマる。

けれどドツポにハマったのは、内部に埋まるソレではなかった。

「ねえ、すっごい好き」

「ッ、っ、何、が？」

「君が」

「き、み？」

「猫山君に夢中なんだ、俺。最近、いつも君のことばっかり考えちゃうんだよ。かわいくて、健気で、それでいてエロいし。休みの日なんかずっと一緒にいたはずなのに、またすぐに会いたくなる。なのに会ったら会ったで大事にしたいの、こうしていじめたいなとも思うし。俺はもうどうしたらいいか分からない。でも好き、それは絶対」

背中と首の間にぐりぐりと頭を押し付けて、好き、好きなんだ、どうしよう、なんて何度も言ってくる橘さん。その態度に僕の方がどうしようと思っっている。身体の内臓全部が沸騰して爆発しそうだ。

いやいや、分からないのは僕の方だ。こんなこと言われたの初めてで困る。本当は両手を上げて喜んででもいいのだろうけれど、喜び方が分からない。

そもそも僕の愛は、基本的に一方通行ばかりだった。もしくは少々両思いでも、僕のベクトルが大きすぎて引かれていた。それなのに今はどちらかという、僕が受け入れられないくらいになっている。更に追加で言わせてもらえば、橘さん級のイケメンで器量よしな人なら、もっとその台詞を言われるべき人はいそうさ。

それなのにいいの、僕で。僕なんかで。

「猫山君は？どうなの？」

あまりにも突然の出来事に、僕の脳は処理能力がとて低下していた。なので橘さんが

言っていることが、ちょっとよく分からなくなっていた。だから確認をこめて振り返った。すると橘さんは、切なそうな顔をして僕を見ていた。

なんでそんな顔をしているんだろうと、慰めるように口をつけた。反射のように頬を撫でるその手が心地よくて、甘えたように肩と頬でその手を挟む。

「僕のこと、好きなの？」

「うん、大好き」

「そっか……」

他愛もない質問にも即答された。その台詞に思わず頬が緩む。愛しい手を今度は自分の手で握って、指の間に更に指を滑り込ませて握り込んだ。そのまま不器用なりに、僕も自分の喜びと一緒に気持ち伝えてみる。

「僕も好き。橘さんが大好き」

でも、橘さんに好きって言ってもらえるの嬉しいなあなんてへによへによに笑ったら、中のが大きくなった。あれ、最大サイズが更新されたかとも思っていたら、またしても息がでないくらいに抱きしめられる。

「どうしよう、好きなのに。猫山君のこと好きすぎてハメ外しちゃいそう」

「いいよ？も、っと、して？大好きだから、橘さんにしてもらって嫌なことなんかない、気

持ち、好き、好き、橘さん……」

「そんなこと言われたら、もっと夢中になるって……!」

「うあああっ!」

けれど僕がなんとか心境を言葉にしたなら、それを境にふわっとした空気が一変した。橘さんは、僕に強引と言ってもいいくらい強く腰を打ち付けてくる。えっ、どうして?とは思ったものの、ガツガツ奥を抉るような動きは感じすぎるし、僕よりしっかりした身体が上にあるのは苦しいくらいで。それなのに両腕を抱えるように抱きしめられているから、暴れることも許されない。

足をバタつかせてみた。それでも腰は止まらなかった。首を振って意思表示をした。でも、荒い息がその場所に落ちてくるものだから、結局興奮してしまっただけ。その高まりを加速させるように首筋や耳をなぶられると、だらしのない声をあげてされるがままになった。

「んううう……っ!あ、あ、あ、あ、は、げし、っ、イキ、そ、あ、う、イク、イ、ぐっ、ううううッ!!」

「はあっ、はあ、っ、猫山君、気持ちいい、気持ちいいね……」

「っ、ぼ、く、も、きもち、いいっ!」

「んん、好き、好き、もっと感じて? いっぱいって?」



はふはふ息をしながらイキっぱなしの現状に耐えていたら、いきなり腕を引かれてまた身体がひっくり返された。そのまま足を大きく広げられて、僕の足の間に橘さんが身体を入れ込む。普段は流している前髪が垂れてきて、それをかき上げる仕草がかっこよかった。はあ、と少し息をつきながら、汗ばんだ額をむき出しにして僕を見下ろされるとゾクゾクする。橘さんがかっこいい。好き、好きだなあ、やっぱり僕もこの人が大好きなんだ。そう実感する。

僕たちの間にできた三十センチほどの空間が寂しかった。だから腕を伸ばして、彼に近づこうとする。

「ん？どうしたの？」

「もっとぎゅってして……？寂しい、くっついてたい……」

「後半にデレてくるよね猫山君って。終われないよ？そんなこと言われたら」

「んん……？ぎゅ、って」

「はいはい、してあげるからもう俺を煽らないで」

「もう、しないの？」

「まだ元気だから逆にならないのが無理かな」

「じゃあまだくっついてられる」

うまく言葉にできているかは分からないけれど、求められていることは純粹に嬉しかった。近づいた顔同士がくっついて、密着した身体が擦れ合って。どうしようもないくらいに心が溢れて、そして彼から溢れてきた分で僕も満たされる。

「はあ、好きだよ、猫山君……。好き、好き」

トントンと、好きの言葉と同じタイミングで前立腺を打たれる度にイっているんじゃないかと思った。これによって僕の体力ゲージが恐ろしいほどに削られているもの、充実はしているから他のことはどうでもいいとも思う。知ったことじゃない、明日のことなんか。立てなくなってもいい。橘さんに愛でもらえる方が大事だ。

ただし、課題として。僕も彼が大好きなんだけれど、それを橘さんに上手く伝えられている気がしないから。言葉にせよ行動にせよ、彼に僕の愛がしっかり伝えられるようにすることが、自分にとっての難題として目の前に正座している。